

## 戦争・文学考

## —日露戦争の場合—

塚谷周次

ハイティーンのころの二葉亭四迷は軍人志望だった。ロシアの帝国主義的野望と日本の国益とが、かならずや朝鮮半島や満州の地で物理的に激突するに違いない。そのとき、自分は軍人として国家のために戦いたいと一途に考えていたからだ。しかし、こと志と違って、陸軍士官学校は3度受験して3度とも失敗する。強度の近眼のせいだったらしい。陸軍士官を断念した二葉亭は、東京外国語学校露語科に入学する。明治14年、二葉亭18歳の初夏。二葉亭は、対ロシア専門の外交官をめざすことにしたのだ。進路は大きく変更したけれど、仮想敵国ロシアに対する憂国の大志は、毫も変わらない。

語学の天稟に恵まれた二葉亭の関心は、じきにロシア語や対ロシア問題よりもロシア文学や文学そのものに傾斜してゆくといい人生のアイロニーを経験することにもなるのだが、それでもなお心の奥深いところには宿敵ロシアというイメージが牢固として沈殿<sup>チン</sup>していた。

日露戦争の勃発は、自然の帰趨であった。

## 戦前戦中

満州の地で日露間に戦端が開かれたとき、鷗外森林太郎は、奥大将を軍司令官とする第2軍の軍医部長として出征し、各地に転戦しながら、後に『うた日記』一卷に纏められる詩歌を制作しています。そ

の中に、明治37年3月27日於広島制作日付のある「第二軍」という長詩があります。第2軍が宇品港にまだ待機中に書かれたこの詩については、博文館私設写真班主任として従軍した田山花袋が、「森軍部長、鷗外先生の吟ぜられたる第二軍の軍歌は、実に終日このオルガンの拙い調子に合はせられて居る」(『第二軍従軍日記』)、と書き留めています。花袋によれば、「第二軍」は奥軍の正式な「軍歌」として作詞されたことになります。

## (第1連)

海の氷こごる

北国も

春風いまぞ

吹きわたる

三百年來

跋扈せし

ろしやを討たん

時は来ぬ

## (第6連)

海幸おほき

樺太を

あざむきえしが

交換歟

わが血流しし

遼東を

併吞せしが

なに租借

## (第8連)

本国のため

君がため

子孫のための

いざ押し立てよ

いざ吹きすさめ

戦ぞ

連隊旗

喇叭の音

「軍歌」の作詞者鷗外というイメージには、何か微妙な陰影がつきまといつつあるのですが、しかし、鷗外という人は、医官ながら軍服を着用してサーベルを吊るす軍人でもあったのですから、「軍歌」の作詞者としてはこれ以上の人材はありません。それに、「軍歌」と云わないまでも、戦争の大義を説き、戦争遂行を鼓吹した戦争詩は、何も鷗外に限ったことではありませんでした。徴兵制忌避者だった夏目漱石も作っています。

漱石は、日露戦争勃発の前年にロンドン留学から帰朝し、一高と東大で教職に就いていました。その漱石がこの年の『帝国文学』5月号に「従軍行」と題する7連詩を載せています。

(第1連)

吾に甞あり、

縁臆吼ゆる、

甞はゆるすな、男児の意気。

吾に甞あり、

貔貅群がる、

甞は逃すな、勇士の胆。

色は濃き血か、

扶桑の旗は、

甞を照らさず、殺気こめて。

(第2連)

天子の命ぞ、

吾嚮撃つは、

臣子の分ぞ、遠く赴く。

百里を行けど、

敢て帰らず、

千里二千里、勝つことを期す。

燦たる七斗は、

御空のあなた、

傲る吾嚮、北方にあり。

(第6連)

見よ兵等、

われの心は、

猛き心ぞ、蹄を薙ぎて。

聞けや殿原、

これの命は、

棄てぬ命ぞ、弾を潜りて。

天上天下、

敵あらばあれ、

敵ある方に、向ふ武士。

(第7連)

戦やまん、

吾武揚がらん、

傲る吾嚮、茲に亡びん。

東海日出で、

高く昇らん、

天下明か、春風吹かん。

瑞穂の国に、

瑞穂の国を、

守る神あり、八百万神。

これら二詩を比べてみると、鷗外が硬軟混交のレトリックを駆使しながら滑らかに筆を運んでいるせいもあって、詩の孕むイメージが明晰で軽快なのに比べて、古風で硬質な漢文体を採用した漱石の方は、晦渋でわかりにくいという嫌いがあるかも知れません。しかし、これらの違いは、発表の場の違いそのものに自ずと収斂されるはずで、鷗外のは第2軍の軍歌として作詞されたものであり、漱石のは東大系の文学誌『帝国文学』に掲載されたものですから。それよりも、注目しておきたいことは、両詩の孕む共通の強いメッセージについてです。

周知のとおり、10年前の日清戦争の講和条約により、日本は遼東半島を領有することになりますが、ロシア・ドイツ・フランスの脅迫的な要求に屈して、これを清国に返還するという屈辱を受けます。いわゆる三国干渉。アジアの新興国日本の、帝国主義という世界的スタンダードのネットワークに加入しようとする野望が、鎧袖一触、あえなく挫折したのです。しかも、南下政策を国是とするロシアは、日本が清国に返還するや否や、ただちにこれを清国から租借するという挙に出る。日本は国際外交というマキャベリズムの手痛い洗礼を受けたのでした。

臥薪嘗胆。当時のマスコミには、この古色を帯びた言葉が盛んに飛び交いました。鷗外作「第二軍」の「わが血流しし 遼東を 併呑せしが なに租借」などの詩句に、その屈辱的な思いが具体的に吐露されています。漱石作「従軍行」もまた、「吾に誓あり」という簡潔な詩句でそれをアピールしました。両詩は、同工異曲、共通のメッセージを発信している。そのメッセージは、三国干渉後の国内世論の流

れをきつちりと領略していました。国民世論の中の日露戦争は、聖戦というイメージに限りなく近いものでした。

さて、そういう国情や国論に、文壇の一角から、鋭い一石を投じた詩人がいました。『明星』の詩人と謝野晶子。戦争の始まった明治37年といえば、晶子26歳。すでに、『みだれ髪』と『小扇』の詩人にして2児の母でした。

大きな波紋を呼んだ問題の作品は、明治37年9月号の『明星』に、「君死にたまふこと勿れ」と題して掲載されました。「旅順口包囲軍の中に在る弟を歎きて」の副題を持つこの詩の第一連は、こうです。

ああをとくとよ、君を泣く、

君死にたまふこと勿れ

末に生まれし君なれば

親のなさはまさりしも、

親は刃をにぎらせて

人を殺せとをしへしや、

人を殺して死ねよとて

二十四までをそだてしや。

鷗外や漱石が「本国のため 君がため 子孫のための 戦いぞ」と戦争を強く鼓吹したとき、彼らの精神をつき動かしていたのは、国家の大義というようなものでした。それに比べて、晶子の詩は、その対極点で発想されているばかりか、絶対悪としての戦争という哲学の萌芽さえ、そこには認められるの

かも知れません。鷗外や漱石の国家のために戦えというタテマエに對して、晶子は、戦地にある弟に死ぬなというホンネを諄々として説いたのでした。そればかりではありません。晶子はそうすることで、つまり、「私」（自我）というものに徹底的に執着することによつて、一般的普遍性の高みにまで達していたと云つてもよいでしょう。晶子の詩は、一人の肉親にだけではなく、はるかに無数の人々へ捧げられることになる。戦争という苛酷な現実を前にして、晶子は、鷗外や漱石と鋭く對峙したのでした。

君死にたまふこと勿れ、

すめらみことは、戦ひに

おほみづからは出でまさね、

かたみに人の血を流し、

獸の道に死ぬよとは、

死ぬるを人のほまれとは、

大みこころの深ければ

もとよりいかで思されむ。

深く鋭く執拗に「私」に拘るのは、文学の王道にはかなりません。個の徹底は、しばしば普遍に至る。晶子は、タブーの天皇さえも対象化せずにはいません。右のスタンザには、晶子の気合いのような文学精神が濃厚に露出しているかと思ひます。

当然のことながら、「君死にたまふこと勿れ」が、『明星』誌上に掲載されたとき、轟々たる批判や非難が晶子に投げられました。とくに大町桂月は『太陽』誌上で激しい個人攻撃を加えます。一方、夫の

与謝野鉄幹はと云えば、世間の批判攻撃を浴び、四面楚歌だった晶子を庇い、励まします。あの虎の鉄幹とか剣の鉄幹と云われた男がです。

閔妃暗殺事件。日清戦争後の明治28年10月8日未明、日本軍と壮士たちグループが朝鮮王宮乾清宮を急襲し、王妃の閔妃を惨殺した。政治的な実権を掌握していた王妃がロシア・シンパだからという理由で。朝鮮からロシアの影響を排除するための乾坤一擲の政治的暴挙だった。この国際的なテロ事件は、10年後に勃発した日露戦争の前奏曲となります。

日本政府は、関係者とその周辺にいた人々を、広島に強制送還しました。その送還者リストに「領事官補堀口九万一、従者と与謝野寛」とあります。つまり、鉄幹は、襲撃団には直接加わらなかつたようですが、危険人物の一人と見なされていたのは確かです。因に、外交官の堀口九万一は、詩人の堀口大学の父。

韓山に秋風立つや太刀なでてわれ思うこと無きにしもあらず

鉄幹の歌集『東西南北』には、こういう壮士風の傾向の歌がいくらかでもある。剣の鉄幹と云われた所以です。鉄幹が、どの程度に事件に関与したかどうかはわかりませんが、王妃を殺害するという国際的テロに奔った人々の政治的心情に、とても近いところにはいたことはまず間違いありません。和歌革新の烽火になった詩歌論のタイトルを『亡国の音』としました。鉄幹という男もまた、二葉亭のように、ロシアを仮想敵国と見る憂国の青年だったのです。『明星』を刊行し、晶子とめぐり逢うまでは。

ついでながら、与謝野晶子以外にもこの戦争に強く反対した少数の人々がいました。かつて『万朝報』で論陣を張っていた社会主義者グループです。幸徳秋水や荒畑寒村たちは、社会主義というイデオ

ロギー上の見地から、非戦論を展開したのでした。晶子の反戦詩とは、発想が違っています。『うた日記』に話を戻せば、詩中「乃木將軍」という6連構成の長詩があります。制作年月日は略ざれていますが、明治37年12月の作品と翌年1月の作品に挟まれて収められています。この期間は、旅順攻防戦の大詰めを迎えた時期に相当しています。

(第1連)

|       |         |       |
|-------|---------|-------|
| つはもの  | 武勇なきには  | あらねども |
| 真鉄なす  | べとんに投ぐる | 人の肉   |
| 往くものは | 生きて還らぬ  | 強襲の   |
| 銚先を   | しばし転じて  | 右手のかた |
| 凶上なる  | 標のたかさ   | 二零三   |
| 巔の    | ふたつ聳ゆる  | 石やまに  |
| たえだえの | 望のいとを   | 掛けてこそ |
| きのふけふ | 軍の主力を   | 向けてしか |

(第2連)

|      |       |       |
|------|-------|-------|
| 霜月の  | 三十日の  | 夕まぐれ  |
| 將軍は  | 高崎山の  | 師団より  |
| ただ一騎 | 柳樹房なる | 本営に   |
| 帰らんと | 曲家屯をぞ | 過ぎたまふ |

|       |         |       |
|-------|---------|-------|
| ほの暗き  | 道のほとりを  | 見たまへば |
| 身うち皆  | 血に塗れたる  | 卒ありて  |
| そびらには | はやこときれし | 将校の   |
| 亡骸を   | かきのせてこそ | 立てりけり |

第1連では、旅順攻略の戦局について述べられる。数度に及ぶ正面突破攻撃は、いたずらに甚大な犠牲者を出すだけで、ことごとく失敗します。そのために、ようやく戦術転換をはかり、攻撃目標を搦手の203高地に変更したことが語られているのです。第2連。11月30日夕刻。第3軍司令官の乃木が麾下の師団本部から自分の本営に単騎帰る途次、一人の兵卒が戦死した士官を背負っているのに遭遇します。

史実を云うなら、日本軍の旅順総攻撃は3回あり、第3回総攻撃は11月26日に開始されます。この総攻撃期間中、第3軍の硬直した戦術に業を煮やした満州軍総司令部は、児玉源太郎を第3軍に派遣して、戦術を根本的に再構築する。その結果、主要攻撃目標を203高地に変更することになります。この攻撃目標変更が、膠着状態にあった戦局を大きく動かすこととなります。第1連で語られる旅順戦の戦局は、ほぼ史実に基づいていると云えます。しかし、第2連のストーリーは、明らかにフィクションです。緊迫した戦場を軍司令官がただ一騎愛馬を走らすことなどはあり得ません。第3連では、兵卒が背負っていた士官が、じつは將軍の次男保典であるとわかる。長男の勝典は、鷗外の属していた第2軍による南山攻撃戦で既に戦死していました。第5連では、保典が203高地をめぐる戦闘で死んだ状況が具体的に語られます。終章のスタンザ。

## (第6連)

|       |        |       |
|-------|--------|-------|
| かくいふを | 駒とどめて  | 聞きましし |
| 將軍は   | 病院の旗   | あるかたを |
| 鞭あげて  | 彼方にこそと | さし給ふ  |
| 面ざしは  | かはたれ時に | 見えねども |
| 目ざとくも | 雲の絶間ゆ  | 視ひし   |
| さむ空に  | まだ輝かぬ  | 冬の星   |
| 更たけて  | 友なる星に  | 將軍の   |
| 睫毛だに  | 動かざりきと | 語りけり  |

乃木將軍は、睫毛一本さえも動かさずに黙々と話を聞きます。兵卒の、將軍とは知らずに語る保典の戦死の話。「睫毛だに 動かざりき」の目撃者は、「まだ輝かぬ 冬の星」なのです。こうして見てくると、「乃木將軍」という作品は、第1連や乃木の子息たちの戦死のほかは、フィクション仕立てであるということがわかります。フィクションである以上、そこに詩人の思想が強く働いているのに違いありません。それは、何か。

私見によれば、「乃木將軍」において、鷗外が意図したものは、寡黙孤高にして無私という悲劇の將軍像の造形にほかなりません。日露戦争における一人のヒーローの誕生。旅順の激戦、単騎愛馬を歩ませる憂愁を帯びた軍司令官、長男につづく次男の戦死に顔色一つ変えずに聞き入るストイックで孤高の將軍。このような乃木のイメージには、早くも乃木という男を後年軍神に昇華させることになる原型が認められるかも知れません。もしそうならば、鷗外は乃木神話の形成に、乃木を深く敬愛するが故に、

何らかの交渉を持ったことになるかと思えます。ヒーローの重要な条件は、悲劇です。乃木希典という謹厳な男の人生は、なぜか悲劇に満ちています。よく知られているように、西南戦争の時、敵軍に連隊旗を奪取されたのが始まりでした。

森鷗外がはじめて乃木希典に対面したのは、留学先のベルリンでした。明治20年4月。鷗外は、滞在先のホテルに訪ねた乃木少将の印象を、「乃木は長身巨頭沈黙厳格の人なり」と『独逸日記』に記しています。若き日の鷗外は、初対面の乃木に強烈なオーラを感じたのです。おそらくたちまち乃木のファンになった。この乃木のストイックで寡黙なプロフィールは、直接乃木を知る人々が様に口にする形容詞でもありました。外国の特派員の目からも、そのように見えた。第3軍の従軍記者の米国人スタンレー・ウオシユバンは、戦陣の乃木について、このように伝えています。

將軍は寡言自制の人、体格は日本人としてはやや大きな方だろう。

髪は短く刈って、髯は黒かったが、戦塵濛々の今日この頃著しく霜を加えてきた。(中略) 一兵卒の戦死さえ、乃木大將は肉親の不幸として感ずる人である。(中略) 過去一千年の歴史にも、絶えて比類を見出せない、堅忍不拔のストイック的精神を發揮して、(略)

〔乃木將軍と日本人〕講談社学術文庫

一度の対談で、鷗外はこの沈着にして寡黙な乃木希典という軍人の、すぐれて人格的な魅力に強く惹かれます。それに、乃木はまた、少年の日々に吉田松陰の叔父玉木文之進の膝下で厳しく教育を授けられたせいもあって、漢詩文の素養にすこぶる富んでいたということもあつたかも知れません。乃木は、

同僚軍人たちの中で、屈指の漢詩人<sup>漢詩人</sup>でした。いずれにしても、鷗外は、ドイツではじめて面識を得て以来、乃木という強力な磁場に生涯惹きつけられることになるのです。

### 戦中戦後

10年前の日清戦争時には、旅団長として旅順方面の攻撃に加わった乃木希典は、日露の戦役では、第3軍の軍司令官として、再び旅順攻略に任じられました。日清戦争時の経験が買われたのですが、旅順要塞は、イギリス軍のジブラルタル要塞に比肩されるほどに、10年前とは完全に様相を一変させていました。旅順要塞総司令官ステッセル配下のコンドラチェンコ少将は、要塞戦の世界的な権威。その少将が、旅順を難攻不落の要塞として、全力を傾注して再構築していたのです。「乃木將軍」の第1連に「真鉄なす べとんに」とあるように。

旅順攻略戦を俯瞰するなら、攻める乃木は陣容改まった旅順要塞という情報をほとんど入手していなかったのではないか、という印象を否認しません。戦争は、孫子の昔から、情報戦でもあります。そのために、鷗外が書いてあるように、「べとんに投ぐる人の肉」の無謀な突撃を何度もくり返すのです。第3回に及んだ総攻撃により、第3軍の戦傷者数はおよそ6万に及びました。先に言及したように、第3回総攻撃の中途から主たる攻撃目標を搦手の203高地に変更して、ようやく旅順要塞を陥落（明治38年1月1日）させることになるのですが、この203高地奪取だけで、戦死5050人、負傷者16930人。じつに1個師団にも相当する兵力です。乃木の次男保典は、「乃木將軍」第5連に描かれているように、この203高地頂上近くで敵弾に倒れました。

明治37年8月の第1回総攻撃により、旅順攻略戦の火蓋が切られました。この総攻撃で、戦死

5000、負傷者10000の大損害を被ってしまいます。第2回が10月26日。11月26日に始まった第3回総攻撃の作戦途中から攻撃目標を203高地に変更したことは、先に述べました。「乃木將軍」の作品上の時日設定が、11月30日。攻撃目標を203高地へと大転換した当日か翌日という設定になっています。そもそも、この攻撃目標の変更は、満州軍総司令部から急派された総参謀長児玉源太郎の直接指導により決定しました。つまり、第3軍の指揮権は、一時的にせよ、乃木から児玉に委譲された。

総参謀長が自ら出向いて1軍の指揮をとるとするのは異例中の異例です。しかし、総本部では、乃木軍の多大な兵力の消耗と貴重な時間の浪費にもかかわらず、戦局が打開されないことに焦燥感を募らせていました。当然ながら、乃木無能、乃木更迭という声が出る。親友の乃木の顔を立てながら、かつ大胆な戦術変更を図って、閉塞した戦局を打開する。児玉源太郎の第3軍一時出向の意図とは、おそらくそういうことでした。乃木にしてみれば、一時的暫定措置とはいえ、指揮権を委譲したのだから、11月30日の「乃木將軍」のストイックな風貌には、いつにもまして濃い憂色の気配が漂っていたに違いありません。その乃木が、朱に染まった次男の亡骸に遭遇するのです。このシーンは、劇的です。

明治三十七年十一月二十六日の未明だった。第×師団第×連隊の白襷隊は、松樹山の補備砲台を奪取する為に、九十三高地の北麓を出発した。(中略)

「みんなこっちへ敬礼しているぜ」

堀尾一等兵は振り返った。成る程そう云われて見ると、黒々と盛り上がった高地の上には、連隊長始め何人かの将校たちが、やや赤らんだ空を後ろに、この死地に向かう一隊の士卒へ、最後の敬礼を送って

いた。

「どうだい？大したものぢやないか？白樺隊になるのも名誉だな」

「何が名誉だ？」

堀尾一等卒は苦々しそうに、肩の上の銃を揺すり上げた。

芥川龍之介の「將軍」の冒頭です。大正11年の作品だから、日露戦争から、17、8年が経ち、乃木の殉死から10年が経過している。乃木神話は、乃木の殉死で完結する。その10年後なら、軍神乃木、乃木神話というイメージは、もうほとんどメジャーでした。逆説的に聞こえるかも知れませんが、だからこそ芥川は乃木をモデルにした小説を書いたのです。

先に見てきたように、乃木軍司令官の第3軍による旅順攻撃の基本戦術は、正面突破の肉弾攻撃というものでした。攻撃の度に甚大な損害を出したのにもかかわらず、乃木は頑なにこの戦術に固執する。軍司令官としての器量や資質を強く問われるところですが、その肉弾攻撃の象徴が、後年有名になる白樺隊と云われた決死隊です。第3回総攻撃に中村覚少将の指揮下ではじめて編成されましたが、文字どおり肉弾突撃を敢行して玉砕します。

芥川が、「將軍」の唯一の戦場シーンとして白樺隊を選択したのは、白樺隊が乃木の軍人としての資質を如実に明かしていると考えたからに違いありません。

「よいか？決して途中で立ち止まって、射撃などをするぢやないぞ。  
五尺の体を砲弾だと思つて、いきなりあれへ飛び込むのぢや、頼んだぞ。どうか、しっかりとやってくれ」將軍は「しっかりと」の意味を伝え

るように、堀尾一等卒の手を握った。そうして其処を通り過ぎた。

乃木將軍（作品では、N將軍）がこれから死地に赴く白樺隊の兵たちを督励に訪れたシーンです。「しつかり」の意味とは、もちろん、生きて帰るな、死んでこいという意味以外にはありません。非情なことばです。作者は、それを乃木に云わせませす。

「嬉しくもねえな」

堀尾一等卒は狡猾そうに、將軍の跡を見送りながら、田口一等卒へ目配せをした。

「え、おい。あんな爺さんに手を握られたのぢゃ」

田口一等卒は苦笑した。

苦笑する田口はインテリですが、そうではない粗野素朴な堀尾は、減らず口の裏側では、「そうして今夜は人後に落ちず、將軍の握手に報いる為、肉弾になろうと決心した」のです。ここに、作者の辛辣なアイロニーがこめられています。一將功成つて万骨枯る。

彼は片手に銃を振り降り、彼の目の前に闇を破った、手榴弾の爆発にも頓着せずに、続けざまにこう絶叫していた。その光に透かしてみれば、これは頭部銃創の為に、突撃の最中発狂したらしい、堀尾一等卒その人だった。

芥川の作品は、いつもテーマが明晰です。「將軍」のテーマは、大雑把に云えば、乃木に象徴される軍人や軍人文化に対する根本的な懷疑と世代間の乖離の二つです。

2章「間諜」から。

「露探だな」

將軍の眼には一瞬間、モノメニアの光が輝いた。

「斬れ！斬れ！」

騎兵は言下に刀をかざすと、一打ちに若い支那人を斬った。支那人の頭は躍るように、枯柳の根もとに転げ落ちた。血は見る見る黄ばんだ土に、大きい斑点を広げ出した。

「よし。見事だ」

將軍は愉快そうに頷きながら、それなり馬を歩ませて行つた。

この作品には、作者と共通の問題意識を持った二人の人物が登場する。一人は、先に登場した田口一等卒。もう一人が、軍司令官の参謀・穂積中佐だ。中佐は、この中国人斬殺の後で、スタンダールの言葉を思い出したりする。

私は勲章に埋まった人間を見ると、あれだけの勲章を手に入れるには、どの位××なことばかりしたか、それが気になって仕方がない。

作者は、モノメニアで粗暴な將軍を穂積中佐に批判させているのですが、その批判はスタンダードの言葉に置き換えられて語られます。

終章の「父と子」は、大正7年10月の或夜の、当時少佐参謀だった中村少将と子息の大学生の対話で構成される。応接間に飾ってあった乃木將軍の肖像画が、子息によって排除されていることから、親子の会話が始まります。

「この中へ懸けてはいけなかね？」

「いけないという事ありませんが、——しかしそれは可笑しいでしょう」

「肖像画はあすこにもあるようじゃないか？」

少将は炉の上の壁を指さした。その壁には額縁の中に、五十何歳かのレンブラントが、悠々と少将を見下していた。

「あれは別です。N將軍と一緒ににはなりません」

このシーンでも、作者の否定の方法と論理は変わりません。N將軍をオランダの『夜警』の画家によって、否定する。

鷗外の「乃木將軍」と芥川の「將軍」とは、とうてい同じ人物をモデルにしたとは思えないくらいに、天地ほどの違いがあります。この落差はどこからきたのか。

鷗外の語る乃木のイメージは、乃木神話の原型ともなりました。それを、芥川の方は軍人のカリカチュアとしてアイロニカルに描く。例えば、大学生の子息が作者の芥川と同じ世代なら、父の中村少将

は、鷗外と同じ世代なのです。「將軍」の「父と子」の乃木をめぐる対立は、鷗外と芥川との対立という読み方もできるかと思えます。

鷗外は、敬愛して止まない乃木の殉死に衝撃を受けて、爾來歴史小説の世界に踏み込みました。一方、乃木が殉死したとき、年齢的に芥川先の輩格である武者小路実篤は、ある西欧のアルチザンの自殺の方がはるかに高等だと断じ、志賀直哉に至っては、馬鹿な奴だと一蹴したのでした。

「將軍」の作者の視線・穂積中佐や大学生もまた、乃木將軍の対極にあるものとして、スタンダールやユーゴーや、レムブラントなどの西欧的価値を持ってきます。白樺派の作家たちと同じ論理です。対極にある西欧的価値をもつてくるという批判方法の有効性についてはしばらく措くとして、彼らが、西欧的な教養や価値観に寄り添いながら、真摯に世界を眺めようとしていたことは間違いありません。かつては、和魂洋才でした。日本の教養や哲学や倫理観を精神の基盤としながら、西欧の技術を吸収する。そういう姿勢は、芥川や大学生の父親世代である漱石や鷗外にも、しばしば見受けられます。しかし、子の世代である彼らにおいては、すでに和魂の価値観によりやく地殻変動が生じ始めていたのです。新しい知識人たち、新しい世代が台頭してきたのです。「將軍」が発表された大正11年、鷗外は逝去しました。

さて、戦時中に「従軍行」を書いた漱石は、戦争の終結した4年後（註）に、満州・朝鮮への46日間の旅に出ます。大学予備門時代からの朋友・中村是公の招きに応じたのです。中村は、戦後に設立された半官半民の国策会社・南満州鉄道株式会社（満鉄）の第2代総裁職に就いていました。初代は、前台湾総督府民政長官の後藤新平。後藤新平は、戦中は満州軍総参謀長にして台湾総督を兼務した児玉源太郎の部下。中村は公は、後藤の部下。そういう人脈でした。

後に紀行文『満韓ところどころ』一卷を上梓します。当然ながら、4年前の激戦地旅順や203高地

を訪れています。旧市街のステッセル司令官邸や、コンドラチエンコ少将邸。トンネルを張り巡らした旅順要塞の迷路のような内部をガイド役の陸軍中尉の案内で見物もしています。強固に構築されているトーチカには、しきりに感心する。

土山の一隅が少し欠けて、下の方に暗い穴が半分ほど見える。その天井が厚さ六尺もあるうというセメントで出来上がっている。

身を横にして、その穴に這い込みながら、くだららと石の回廊に降りた時に、仰向いて見て始めてその堅固なのに気がついた。外堀を崩した上に、この厚い壁を破壊しなければ、砲台をどうすることも出来ないのは攻め手に取って非情に困難である。

漱石が嘆息しているように、第3軍が、肉弾攻撃をくり返しては犠牲者を出しつづけた敵要塞が、日本軍の想像をはるかに超えた、まさに金城鉄壁だったことがよくわかります。203高地にも登りました。

中尉はその潰れた土山の上に立って我々を顧みた。我々も無論其の上立っている。此の下を掘ればいくらでも死骸が出て来るのだという。

戦後4年が経つというのに無数の死骸が放置されたままになっている。土中は死屍累累である。鬼哭

啾々とした禿げ山に立って、漱石は何を思ったのか。特別の感情は露出していません。しかし、先に述べたように、漱石も戦争を鼓吹する新体詩を書いていたのです。

この紀行文を読んでいて、不思議に思うことがあります。漱石は、この嘗ての激戦地を訪れながら、どこにも乃木將軍の名を書き留めていません。乃木は、この地で国民的なヒーローになった。旅順要塞といえば、乃木將軍。それが、当時の国民感情だろうと思います。その乃木の名がどこにも書かれなかった。敵軍のステッセル將軍の名前は登場させているのに。

ついでながら、『満韓ところどころ』は、帰国直後の明治42年10月から12月まで、「朝日新聞」に連載されました。乃木將軍の殉死は、その3年後になります。

註1 二葉亭は、明治35年5月2日に母校東京外国語学校教授を依願退職して、翌日東京を発ってハルビンに向かう。

面白いことに、あらかじめ渡満後の便を得るために、大庭柯公と一緒に乃木中將宅を訪問し、通商局長杉村某宛の添書を貰っている。大庭は、共にロシア語を学んだ友人。ジャーナリストだった。安定した職業である母校の教授職を投げてまで、二葉亭を満州の地に駆り立てたものは何なのか。実のところはよくわからないが、日露戦争前夜の満州で軍事スパイの任務に就いていた石光真清陸軍大尉が後年書き残した4部作『石光真清の手記』に、興味深い記述がある。

当時、石光はカムフラージュのためハルビンに写真館を経営していた。ここを本拠地として、石光機関のネットワークが満州全域に張りめぐらされていた。

この頃、飄然と現れた奇人の中に、ロシア文学者二葉亭四迷氏がある。何の目的でハルビンに来たのかと訊ねても、いつも笑って答

えなかった。徳永商店に滞在してブラブラと日を暮らし、何といつて仕事もない。気が向けば私の写真館に遊びに来たまま一週間も泊まり込み、写真館のお客を相手に自由なロシア語を操っていた。(中略)彼は私の第一回の旅行談を聞いて大いに興を湧かしたと見えて、暇を見てはメモをとっていた。その頃、満州軍駐屯ロシア軍の異動命令書が妙な手筈で私の手に入った。いつもなら秋山運次郎に翻訳を頼むのだが、折悪しく出張中だったから四迷氏に依頼した。四迷氏はちよつと書類を手にしてから放り出し、

「こんなつまらんものは嫌だよ」

と無愛想に言った。是非頼むと再三懇請してみたが、どうしても承知しなかったので、私は、

「今後は何があつても君には頼まん」

と乱暴な口を利用して引揚げた。これで同氏との交友も終わったと思つていたら、四、五日立って四迷氏が飄然と写真館に現れ、相変わらず呑気な話ばかりして、翻訳の一件などは、とうに忘れていた。

大陸浪人のような生活をしていた二葉亭の風貌が垣間見えて、興味深い。もちろん、二葉亭は、この怪しい写真館が軍事スパイの巣窟だということは百も承知なのだ。

ついでながら、同書には、森鷗外とのちよつとした交渉が記述されている。明治38年4月10日、奉天城内において、第2軍は橘周太郎中佐の慰靈祭を行った。司祭者は、幼年学校からの親友の石光少佐(戦争当時少佐に昇進、第2軍管理部長だった)。しかし、どうしても祭文が書けない。「恥をしたので第2軍軍医部長、森林太郎博士を訪ねて苦衷を訴え、祭文の執筆を依頼」する。鷗外は、二つ返事で引き受けた。セレモニーが無事に終了しての帰途、第2軍司令官奥大將が、独言のように言う。「石光君が名文家だとは知らなんだ。よう出来ておつた。なあ税所君」

註2 乃木がどのくらいの漢詩を遺しているのかは、諸説があつてよくわからない。100とも200とも言う。多くは、七言絶句だ。その中で、もっとも人口に膾炙されてきた「乃木三絶」というのがある。

山川草木転荒涼 十里風腥新戰場

征馬不前人不語 金州城外立斜陽

爾靈山險豈難攀 男子功名期克艱

鉄血覆山山形改 万人齊仰爾靈山

王師百万征強虜 野戰攻城屍作山

愧我何顏看父老 凱歌今日幾人還

第3軍司令官乃木もまた、自らの激烈な戦争体験を作品化せずにはいられない男だった。

註3 芥川龍之介は、大正10年、大阪毎日新聞社の海外視察員として、3カ月以上の中国旅行をしている。「支那遊記」によれば、芥川は現代中国の胎動（そのころ、中国共産党が結成されている）に知的好奇心を示しているが、満州や旅順には関心を示していない。「將軍」は、その翌年の作品であるけれど。

註4 漱石は、戦争の3年後の明治41年9月1日から、「三四郎」の連載を開始した（朝日新聞）。『満韓ところどころ』の旅の1年前である。

三四郎は、故郷の熊本から大学に入学するために上京する。車中、風変わりな男と一緒にいる。

「こんな顔をして、こんなに弱っているは、いくら日露戦争に勝つ

て、一等国になっても駄目ですね。(中略)と云ってまたにやにや笑っている。三四郎は日露戦争以後こんな人間に出逢うとは思いますが、奇らなかつた。どうも日本人ぢやない様な気がする。

「然し是からは日本も段々発展するでしょう」と弁護した。すると、かの男は、すましたもので、「亡びるね」と云った。——熊本でこんなことを口に出せば、すぐ撲られる。

三四郎は、この男、「偉大なる暗闇」の廣田先生と再会することにもなるのだが、その先生の周りには、「日本人ぢやないような」人が幾人も登場して、三四郎を悩ませる。つまり、「三四郎」という作品は、明らかにアプレ・ゲール文学として構想されている。

### 主要参考文献(単行本のみ)

|               |               |        |       |
|---------------|---------------|--------|-------|
| 【機密日露戦史】      | 谷寿夫           | 原書房    | 1966年 |
| 【戦略日露戦争】      | 鳥貫重節          | 原書房    | 1980年 |
| 【日露戦争】        | 児島竊           | 文芸春秋   | 1990年 |
| 【壁の世紀】        | 大江志之夫         | 講談社    | 1992年 |
| 【もうひとつの日露戦争】  | コンスタンチン・サルキンフ | 朝日選書   | 2009年 |
| 【陣中の豎琴】       | 佐藤春夫          | 昭和書房   | 1932年 |
| 【森鷗外】         | 石川淳           | 三笠書房   | 1941年 |
| 【森鷗外と日清・日露戦争】 | 末延芳晴          | 平凡社    | 2008年 |
| 【鷗外文学】        | 日夏耿之介         | 実業之日本社 | 1943年 |
| 【君死にたまふことなかれ】 | 深尾須磨子         | 東洋書館   | 1954年 |

|              |       |        |       |
|--------------|-------|--------|-------|
| 【晶子曼荼羅】      | 佐藤春夫  | 講談社    | 1956年 |
| 【近代の小説】      | 田山花袋  | 大原出版社  | 1941年 |
| 【明治の作家】      | 内田魯庵  | 筑摩書房   | 1941年 |
| 【漱石の漢詩】      | 松岡譲   | 十字屋書店  | 1946年 |
| 【漱石とその時代】    | 江藤淳   | 新潮社    | 1965年 |
| 【夏目漱石】       | 瀬沼茂樹  | 東大出版会  | 1962年 |
| 【芥川龍之介】      | 吉田精一  | 新潮文庫   | 1958年 |
| 【芥川龍之介の世界】   | 駒尺喜美  | 法政大学   | 1967年 |
| 【私の漱石と龍之介】   | 内田百閒  | 筑摩書房   | 1965年 |
| 【志賀直哉論】      | 中村光夫  | 文芸春秋新社 | 1954年 |
| 【志賀直哉の生活と作品】 | 阿川弘之  | 創芸社    | 1955年 |
| 【志賀直哉私論】     | 安岡章太郎 | 文芸春秋新社 | 1968年 |
| 【白樺派の文学】     | 本多秋五  | 講談社    | 1954年 |
| 【思ひ出す人々】     | 内田魯庵  | 河出文庫   | 1956年 |
| 【二葉亭四迷論】     | 中村光夫  | 新潮文庫   | 1959年 |
| 【二葉亭四迷】      | 小田切秀雄 | 岩波新書   | 1970年 |